「しっちゃかめっちゃかの成長」

フィリピンの教会の姿から学ぶ

2008/6/10
佐々木　正明

今回、「アジアの教会成長」という題で書くように言い渡されました。ただ教会成長という言葉はハモンド・オルガンやジープと同じで、「トヨタのジープ」などと言うものはあり得ません。同様に、本物の教会成長を論じるのは、教会成長論というジープに触れたことがない筆者には無理なことです。せいぜいジープに似た車について語るていどのことです。またアジア諸国の教会には、「教会成長」を論じる基盤となり統計や歴史が、資料とされる文書としては、ほとんど存在していないのです。また私自身、一般の日本人よりはいくらかアジアのことを知っていたとしても、せいぜい、あっちの教会が大きくなっているとか、こっちの伝道が目覚ましいといった類のことしか言えないからです。

そこで、はなはだ勝手に、自分が 18 年間滞在し共に働いた、フィリピンのアッセンブリー教団に的を絞り、その中から、現在の日本の伝道にも、なんらかの示唆になりそうなことを、二つ三つ取り上げて見ることで、お茶を濁したいと思います。

１．　はてしなく無秩序な伝道

勝手きまま、自由自在、出たとこ勝負の行き当りばったりで、計画もなにもあったものではなく、はてしなく無秩序なのがフィリピンです。多分東南アジアの大部分の国々は、似たり寄ったりのありさまだと思います。 これは、多民族、多言語、多文化が入り混じり、常夏の気候の中で楽天的に、しかし、常に部族間の抗争に脅かされながら生きて来た人々に、共通する生き方とも言えます。伝道も、教会建設も、このような生活感覚から行なわれています。

それに拍車をかけたのが、米国の統治下で米国アッセンブリー教団の一教区として出発したという、フィリピンのアッセンブリー教団創立のいきさつです。米国アッセンブリー

教団は、その成立過程から、中央集権的組織に恐れと嫌悪感をもって、極めて会衆制度に近い長老制度を取り、個々の教会、個々の信徒の自由を重んじていました。

絶対主義のスペインの統治と、中央集権監督制のカトリック教会に慣らされていた人々に、突然押しつけられた民主主義と会衆制度は、形の上では、アメリカ的な制度と組織を作り上げましたが、実際のところは、アメリカのような「大人」の政治形態も教会自治も生み出さず、一方では無秩序教会、他方では以前にもました絶対主義教会という、まさにフィリピン的な、アナーキー教会を産み出していました。

整然とした秩序と綿密な計画を重んじる日本人には、弱点あるいは欠点としか見えないこのような無秩序性に、実は、フィリピンのアッセンブリー教会全体としての強さがあると、わたしは判断しています。 この無秩序性の強さは、「ゲリラ的同時多発型伝道」という表現でまとめられます。陽気なイベント好きな民族性をもちながら、娯楽施設の少ないフィリピンでは、華々しい大衆伝道がもてはやされます。ただしこれは、実際の伝道の効果よりも、伝道者の名を上げ、献金を集めることに大きな効果があるために、性懲りもなく繰り返されていると言えます。フィリピンで、本当に効果を上げている伝道は、小規模のゲリラ的同時多発型伝道です。

これはほとんど計画らしい計画もなく、小さく名もない伝道者や信徒が、親族や友人のつてを利用したり、やれ空き家があったから、ほらあっちのバリオキャプテン（地区長）が招いているからと言って、教団はおろか教区の許可も、信徒の場合は牧師の承認もなく、多くの場合、資金的な目安もないままで始めたりする、「集会みたいなもの」のことです。

あっちで始まりこっちで潰れ、向こうで奇跡が起こり、ここでは資金難で青息吐息という家庭集会や開拓伝道が、フィリピン全体のアッセンブリー教会としては、毎年数百、あるいは千を越える単位で起こっている。そして、その中の幾つかが生き残り、成長して教会になるわけです。1996 年、フィリピン・アッセンブリー教団は、200 以上の教会を加えました。その大部分が、教団も教区も関与しない、個教会単位の、あるいは牧師も許可した覚えのない、信徒による勝手な集会によって始められたものなのです。

説教はしっちゃかめっちゃかで、神学的には、かなりはなはだ怪しくて、牧会配慮も何もあったものではないというのが、ほんとうのところだとしても、ボランティア信徒は伝道をし、集会を継続し、洗礼を授け、聖餐をとり行なって、大概の場合、やがて、聖書学校を卒業してまだ間もない、青二才牧師を迎えることになります。殆どの場合、この青二才牧師と信徒伝道者は折り合いが悪く、互いに涙を流して自己主張を繰り返し、結局、仲良く喧嘩別れをします。こんなことを数回やったうえで、なんとか互いに我慢できる牧師

と信徒の関係が出来あがって、凸凹に丸くおさまり、10 家族前後の教会となるわけです。

ですから、日本人の感覚から言うと、教会といっても、とても教会とは思えないようなところもあるのですが、それなりに立派に救われる人も癒される人もあり、豊に賜物をいただいている人もいる、コリントやガラテヤの教会と同じく、問題だらけの生きた教会であるわけです。

教団全体としては、どこに幾つの教会があり、何人の信徒がいるのか、皆目わからなく、調べようにも、アンケートも完全に無視されるのが普通です。ですから、「教会成長論」の元となる、データも存在しないことになるのです。

このような伝道方法をそのまま日本に持ち込むのは、無理というより馬鹿げていますが、その長所、利点、強みを知り、それを生かすことは有益だと思います。

a・臨機応変

上部の団体や委員会や牧師の許可と承認を得ることなく、いつでも勝手に伝道を開始できるのですから、手軽です。前髪だけが長くて後ろが禿げている「チャンス氏」がやってくれば、前からグイと手を伸ばして捕まえることができるわけです。そして、うまくいかなければ、あれこれ準備に手間ひまかけ、金を費やしたわけではありませんから、気軽にすぐに止めることもでき、「傷を大きくする」こともありません。一般的に、フィリピン人にとっては、何事につけてもとにかく始めることが大切で、鳴り物入りで始めてすぐ「ぺしゃって」しまっても、だれも非難はしませんから、楽な気持ちで手が付けられるわけです。すぐに責任を追求するのは、こと伝道に限ってはふさわしくないようです。

b・賜物の活用

伝道者や信徒が、あまり監督者の目を気にすることなく、勝手に活動ができるのは、より多くの賜物をより良く生かすことにつながります。失敗も多いけれど、もともと楽天的なフィリピン人は、失敗を恐れて百の努力を重ねて苦労するより、十の努力だけで失敗を許すほうを選びます。石橋を叩いて渡らない日本人には何事も起こりませんが、崩れそぅな竹の僑でも、突っ走って渡ってしまうフィリピン人には、「神様の尻拭い」的奇跡も起こります。多くの者が小さな賜物を一生懸命に用いる内に、だんだん大きな賜物になって行き、やがて多くの者が大きな賜物を用いるようになります。わたしたちの回りには、日本では数少ない、信徒上がりの「立派な伝道者」が随分いたものです。

c・安上がりの伝道

多くの場合、何のてづるも無い所に、「伝道戦略的」に金をかけて開拓を始めるのではなく、引っ越して行った信徒を追いかけて、家庭集会を始めたとか、あっちの集落に信徒の親戚がいて、病気のために祈って欲しいと言っているとかで、経済的に伝道が始められます。信徒によって始められる伝道はさらに経済的です。フィリピンは貧しい国です。お金がなければ伝道ができないとするなら、フィリピンは伝道のできない国になります。

d・井戸端会議

フィリピンでも、だんだん井戸端会議が少なくなっています。しかし、フィリピン人の典型的なおしゃべりは健在です。バスに乗っても、買物をしていても、知らない者同志がすぐ親しくおしゃべりを始めます。しかも恐ろしくおせっかい焼きで、たとえば、わたしを日本人と見ると早速、「結婚している？」「子供は何人？」「奥さんは日本人？」から始まって、男同士なら、「どうしてフィリピン人のセカンド・ワイフを持たないの?」「なんなら世話しようか？」と続きます。これが、一歩踏み込んだ個人の証と、伝道を容易にしています。学校教育も、黙って聞いて喋らない子供を作る日本とは違って、アメリカ的に何でも上手に話せるように訓練します。信徒の自由なおしゃべりが裾野にあってこそ、かたちのある伝道が広がるのです。

2.　個人主義の伝道

欧米キリスト教の最大の悪は、キリストの教えと個人主義をまぜこぜにして、世界中に広めたことだと言った人がいます。欧米宣教師たち、あるいは書物、神学によって無批判に取り入れられた個人主義は、フィリピンでも、個人の自由な伝道を可能にした利点の一方、多くの弊害も産み出しています。

a・血族共同体

一般のフィリピン人にとって最も大切なものは、家族と呼ばれる血族共同体です。家族を大切にするという社会の共通認識が高いため、「家族のため」という理由があれば、泥棒も許され、人殺しさえも、刑法的に処罰されても社会的には許されることがあります。公務員や会社の中には「親族重用主義」がまかり通り、誰もが当然と感じています。公平な取り扱いをすると、家族を何よりも大切にするフィリピンの社会通念に反するため、「家族を大切にしない者」というレッテルを張られ、公平に抜擢してもらった当の本人たちでさえ、物笑いの種にするのです。娘たちが日本に身売りするのも、家族の為ならば、もちろ

ん立派な行為と考えられています。それでも、内部社会の和の為には法律も平気で破り、「社会をお騒がせしました」と詫びるだけで、法律に違反したことについては、意に介しない日本人よりは「まだまし」かも知れません。

こういう家族の繋がりの強い中で、個人的な決断を重んじるアメリカ的な伝道は、皮相的で効果がありません。親戚親族の中で最も有力な者ならいざ知らず、一人の人間が、宗教を変えるような一大事を、個人の判断と決断でするわけがないからです。

フィリピンの人口５万人以下の地方教会の大部分は、構成人員の 90%以上が一つの大家族によって占められています。つまり、アッセンブリー教会というのは名ばかりで、実際は、田吾作の縄張り教会、権兵衛の身内の教会となっていて、それぞれ、多吾作の家系に属さない者や、権兵衛の親族でない者は出席できないのです。出席できる一割程度の者は、そのような権力を無視できる「強い一匹狼」か、だれからも無視されている「ちっぽけな」人間だけとなるわけです。

フィリピンの家族制度を認めた伝道を考えるならば、ひとつの村、ひとつの町、ひとつの市に、たくさんのアッセンブリー教会を作るべきです。始めは田吾作の家族教会、権兵衛の親族教会、与太郎の家系教会、熊さんの権力範囲教会で良いのです。それがやがて、キリストにあって、隔ての間垣が取り除かれひとつにされているのだという、霊的事実に生きることができるようになるのです。

ところで、フィリピンのアッセンブリー教団には、存在するアッセンブリー教会の半径 7 キロメートル以内では、伝道を始めてはならないというおかしな規則があります。わたしが伝道したバギオ市も、半径 7 キロメートルにすっぽり人ってしまう規模で、すでにひとつのアッセンブリー教会が存在していたために、たとえその教会がどれほど惨めな状態にあっても、新しく開拓を始めることはできませんでした。５年間待った上で、わたしは聖書の理念を支えに教団総理を説き付せ、教区長を説得し、その教会の牧師とは 4 時間に渡って激論を交わした上で納得させ、初めて伝道を開始したいきさつがあります。幸い、現在はいくつものアッセンブリー教会があるようです。

縄張り争いは日本にもありますよね。牧師たちの肝っ玉が小さいからです。1 キロメートルも歩かないのに、小僧寿司の店が三つもある町がありました。ふたつ三つのアッセンブリー教会が近くにあったら、全体で考えると、客が増えると思うんですが、お客さんを奪いあって喧嘩になりますかね。

b・三つの自立主義

近代宣教の理論的柱として、米国アッセンブリー教団も全面的にこれを取り入れ、強烈な推進者また擁護者となったものに、「インディジナス・セオリー」があります。これは、宣教地の教会ができるだけ早く、経済的自立と政治的自立と伝道的自立の、三つの自立を果たすように促すべきだという主張です。

この方策は、多くの宣教地で大きな効果を上げて来ましたが、一方、様々な弊害も産み出し、ここ 20～30 年、宣教学の中で論議されてきました。遅ればせながら、(アッセンブリーの中からも、最近そのような声が聞こえるようになりました。今年の 1 月に出された Asian Journal of Pentecostal Studies 誌に載った APTS の学長、カーター博士の論文もそのひとつ）これらの議論のほとんどは、実践的な面のみを取り扱っていて、この理論自体が、非聖書的な個人主義の理念に立っているという、最大の欠点を見逃しています。非聖書的な個人主義の理念と方策によって建てられた教会は、否応無く、非聖書的な個人主義の色彩を強く帯びる、不健全な教会になります。ことにフィリピンのような、血族共同体意識、地域共同体意識の強い国では、これがどれほど健全な教会を立て上げる弊害になって来たか、計り知れないものがあります。

信徒たちがいがみあい、伝道者たちが争い合う。選挙になれば「現ナマ」が飛び交い、凶器まで隠されているという、コリントの教会も真っ青のフィリピンの教会。愛の交わりや助け合いは滅多に見られず、教会間の協力も希薄なフィリピンの教会。このような教会ができた理由には、文化的、社会的背景もさることながら、非聖書的な個人主義的教会観があったことが明白です。

3.　ペンテコステ的伝道

行き当りばったりの「はったり伝道」が、ペンテコステ的であるという、拭い難い通念があります。良く言えば、人間の計画や能力を越えてお働きになる神様への、素朴な信頼がそうさせているのだとも言えます。ペンテコステ的伝道とは、神様は現在もモーセの時代と同じように、あるいはパウロの時代とおなじように、お働きになるという信仰に立った伝道です。

フィリピンは迷信深いカトリック国、日本は科学的仏教国などと言われます。しかし両方とも、基本的にアニミズムが盛んな国です。心の深層では人間の世界と精霊の世界に隔てがありません。幽霊や背後霊をはじめ守護霊や魑魅魍魎が、テレビと一緒に茶の間に顔を出し、ご先祖さまが生きている人間のなりわいに、いちゃもんを付けるのは、日本もフィリピンと同じです。実際、世界中どこでも、基本的にアニミズムの感覚をもった人間が大

部分です。そして聖書の背景になっている世界も、聖書が教えている世界も、アニミズムの世界観と共通します。

ところが、啓蒙思想の影響を受けた西欧キリスト教は、このような世界観を古い迷信として片付けてしまい、そのような世界観の中でお働きになった、神様を否定してしまいました。西欧キリスト教の神様は、人間の理性の範疇内で、科学的原則にのっとってしか働けなくなってしまったのです。

このようなキリスト教は、悪霊に取り憑かれ、幽霊に悩まされ、サントニーニョ（マゼランが持って来た幼児期のキリスト像の複製で、どこの家庭にもある）が夜中にダンスするため眠れない人たち、夢でいろいろ悪いお告げを受けたため、豚の犠牲をたくさん捧げなければならなくなった人たちに、何の助けにもなりませんでした。また薬も医者もない、あってもお金がないという、大多数の人々の慰めにもなれないで来ました。

それに対してペンテコステ的伝道は、「愚か」にも、今も生きて活躍しておられる神様を信じる信仰から出ています。とくに、神学も何もない「平信徒」は、単純に聖書を読み、そこに書いてある通りのことを信じ、書いてある通りを実行しようとしました。

もちろんどこの信徒たちも、信徒らしい素直さをもって、聖書に書かれてある通りの奇跡を期待したでしょうし、悪霊を追い出してほしいと、宣教師や牧師にお願いしたこともありました。しかし彼らは、しっかりと神学を学んだ「玄人の教職者」に叱られるか、良くても失笑を買うのが落ちだったのです。

結局、多くのプロテスタントの信徒は、形而上学的な教理に於いては、立派なクリスチヤンでありながら、病気、家庭のいざこざ、悪霊、幽霊などの日常問題については、相変わらず占い師や祈祷師、あるいは信仰治療師のたぐいの、お世話になり続ける他なかったのです。

幸い、初期のアッセンブリーの宣教師は、神学的素人で「迷信深い」人たちでした。自分もキリストの名によって悪霊を追い出し、病気を癒す一方、信徒たちにも奇跡を期待するように教えたのです。これはフィリピン人の世界観と精神土壌と必要性に合っていました。そして神様も、幽霊を恐れたキリストの弟子たちと同じほどに、愚かで迷信深いフィリピン人たちの信仰を尊び、奇跡をもって答えてくださったのです。これがフィリピンのアッセンブリー教会の、力強い成長の要因のひとつであることは、疑いのない事実です。